平城遷都の要因と日本古代都市の一特色

田　辺　征　夫

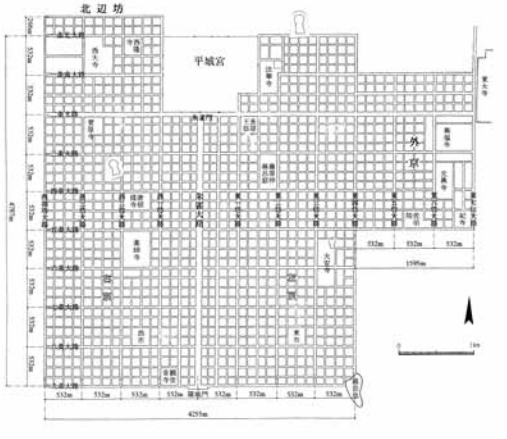
はじめに

日本の古代都市の成立に関する議論は、平城宮跡や平城京域での発掘が進んだことなどによって、ようやく具体的な議論が可能になってきたといえる。

平城京に先行する藤原京においても、近年の京域における発掘調査の進展に伴って、平城京とは異なる都市計画が解明され、さらに飛鳥地域における調査も進展し、７～８世紀の律令国家体制が成立し完成する時期の中核機構および首都機能の成立過程が少しずつ解明されつつある。

しかし、現段階では、まだ、日本古代都市論を論じるとすれば、都市機能が備わったと考えられる平城京を軸に据え、ここに至る過程やその周辺の様相を検討する方法が最も現実的であろう。

こうしたことを前提に、本論では、平城京遷都の背景とその直接的な理由を明らかにすることを通じて、日本古代都市・都城の特色の一端をあらためて考えてみようとするものである。



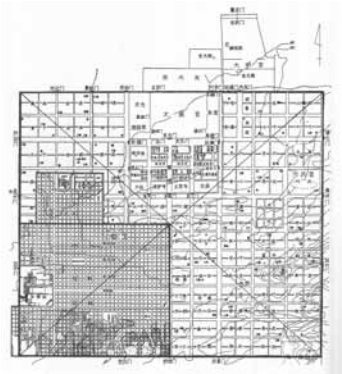
第１図　平城京条坊復原図

１．平城京の姿

すでに調査、研究の進展した平城京の全体像はかなり明確になり（第１図）、あらためて論じるまでもないが、筆者が重要と考える基本的な特徴は以下のように要約できる。

１）平城京は、平城宮を中核に置いた方眼状に整然と道路を通す計画都市で、方格地割都市と称される。計画の基本は道路計画である。京の本体は、南北の中央道路である朱雀大路を中心に、左右に８本の大路、東西方向には10本の大路を配し、大路の間には小路を等間隔で通す。各道路は重要度に従って幅員が異なった。発掘成果によると、朱雀大路は、路面幅約７４メートル、宮城の南面を通る二条大路は約３２メートル、その他の大路は１９メートル前後であった。また小路にも差があり、坊間、条間の中央小路は８～１２メートル、その他の小路は６～８メートルであった。

２）その平面形態は、基本的に唐長安城を模すが、同時に日本の実態に合わせた計画を随所に実施している。外京や北辺坊と呼ばれる張り出し部は、その顕著な例であるが、基本的な形態上の特徴で言えば、平城宮が京の北端中央に置かれる点は長安城に類似するが、長安城が横長であるのに対し平城京は縦長に造られる。これらのことについては、井上和人によって詳細に論じられた（註1、第２図）。



第２図　井上和人による唐長安城と平城京

3）中国で古くから成立した陰陽五行の思想に基づき、世界の中心であり天子の位置を示す北極星を頂点とする正方位をとる。

4）遷都の詔には、その占地にあたっては、いわゆる風水思想に基づき「四禽図にかない、三山が鎮めをなし、亀筮をよくする」位置をとる。実際の地勢でみると、奈良盆地の北端にあって、北は平城山丘陵の裾から南に標高の下がっていく地形に立地する。したがって、中枢である平城宮は、地形的には最高所に当たり、天子南面の思想に基づき、天皇は南に向かって天下を睥睨する形となる。

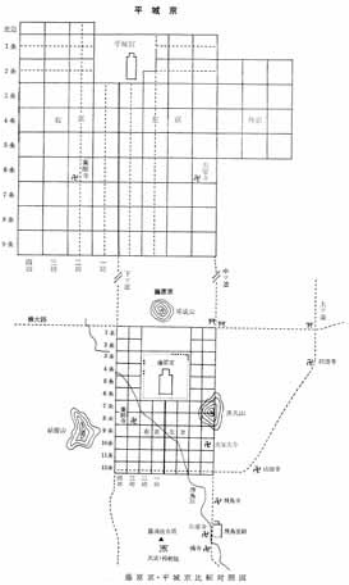
5）モデルとなった唐長安城をはじめとする中国の都城は、いわゆる城郭都市として、二重に囲われる城壁をもつ（註2)。城壁で囲まれる都市の形態はヨーロッパなどの都市国家では一般的で、都市の概念と城壁は密接不可分の関係で考えられている。平城京についても、羅城の存在が想定されるものの、実際の発掘成果では京の南面にのみ設けられていた可能性が高く、平城京全体を囲繞する城壁はなかったと考えられる。これは、中国の都市が城壁で囲うことで都市全体を防御の目的などもあって外界と断絶した世界を形成していたのに対し、平城京は、それほどの高い意識はなかったものと思われる。

6）長安城では、坊が行政単位として重要な位置を占め、その制度は平城京でも採用される。発掘成果では、坊の周囲に築地塀がめぐらされていた可能性が高く、坊ごとの住民の統制・管理は行われていた。

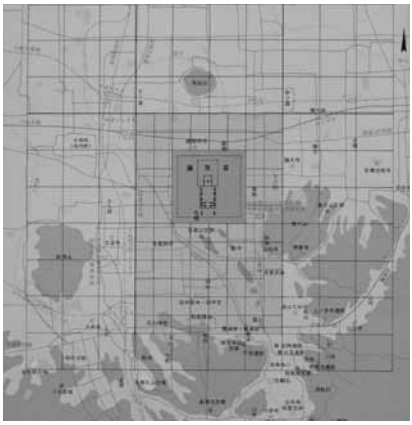
7）都市論から見たときに、都市の重要な要素として顕著な人口の集住があげられる。平城京の最盛期の人口をどのくらいに見積もるかは、議論の分かれるところである。かつて、澤田吾一が、戸籍計帳の家族構成などから推計し、また平城京に近い面積を有する江戸時代の金沢市の人口などを参考にして、20万人という想定をした（註3)。長い間この数字が独り歩きをしてきたが、平城京の発掘調査が進展し、見つかる建物の建蔽率などから、４～５万程度ではないかとの推定もされるようになった。しかし、平城京が、基本的には平城宮に勤務する貴族や官僚群の居住地であることを考えたとき、彼らの家族構成や使用人

を含めた数字が基礎となる。職員令に規定する二官八省勤務の総定員数およそ１万人弱、その家族数の平均を仮に１０人と計算したとき１０万人という数字が出てくる。おそらくこの数字が、平城京の人口を考える目安となろう。平城京では、発掘成果からも、常に、どこかで宮殿や寺院そして住宅の建設が行われていることがわかっているので、各地から集められた作業従事者、税物を運んでくる農民、一部商人などの存在を考えると、実際には、１０万から２０万人の間の人口推計が可能かもしれない。ただし、これまでの京域の発掘成果では、遷都当初の１０年から２０年間の建物遺構の発見密度は極めて低く、７３０年代ごろからどこを発掘しても建物が見つかるようになる。こうしたことをみると京域にくまなく広がるような集住は８世紀の中ごろ前後から後半にかけてと思われる（註4)。

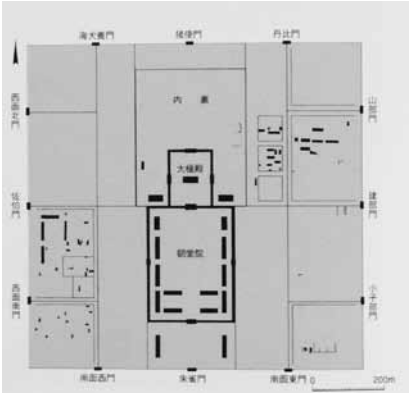
２．解明の進む藤原京



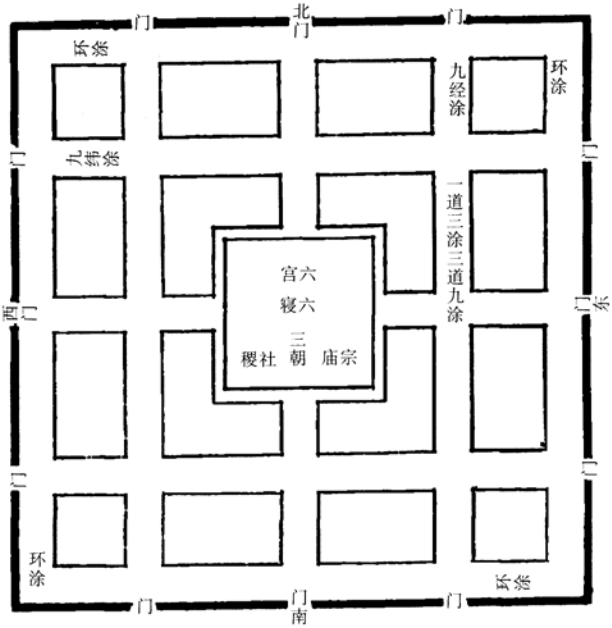
第３図　岸説　藤原京と平城京



第４－１図　現在の藤原京想定図



第４－２図　藤原宮の配置



戴震《考工记图》王城图

第５図　載震　周王城復原図

近年の藤原京域での発掘調査によって明らかになった藤原京の平面プランは、かつて岸俊男が想定した京域よりも広く、東西南北十条ずつの道路を通す正方形の方格地割都市であった（註5）。この形状は、唐長安城とは異なり、中国の古い周代の規範にのっとった都市造りであると考えられた。このことによって、逆に平城京の都市計画が、唐長安城をモデルとしたことがより鮮明になったといえる（第4-1，4-2図および第5図）。

日本で最初の本格的都市という表現が藤原京に与えられている。しかし、藤原京は、遷都後わずか１４年目にして平城京への遷都の詔が発せられ、その２年後には実際に遷都の運びとなる。わずか１６年間の都であったため実質的に都市としての機能がどの程度備わったかはきわめて疑問であろう。藤原京には宅地班給基準が残されており、はじめて宅地を班給された貴族や官人がこぞって京域内に家を建てることになるが、平城京で見た遷都後しばらくの宅地の有り様から見ると、藤原京への遷都後わずか１０年あまりでは、かなり移住率が低かったのではないかと想像される。しかしこれらの点は今後の京域での調査の進展に待ちたい。

３．平城京への遷都の背景と要因

ここで、なぜわずか１６年で慌ただしく藤原京から平城京に遷都したのか、その背景を考えてみたい。

この問題については、さまざまな観点から諸説があったが、近年とくに指摘されるのは、遣唐使の断絶とその再開である。663（天智２）年、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に敗北した後、間もなく、日本と唐との遣唐使の交流は実質的に断絶し、これが再開されたのは、702（大宝２）年であった。およそ３０年間、公式の交流がなかったことになる。３０年ぶりに派遣された遣唐使が見た唐長安城の形が藤原京と異なることに衝撃を受けた律令政府が、急きょ、唐との関係をただし、一口に言えば、国際潮流に乗り遅れまいとして断行したのが平城京遷都であるとする考えである（註6）。

平城京の都市計画が長安城とかなり関係が深いことはこれまでの発掘や研究成果から見ても間違いないことである。当時の東アジアでは、いち早く隋・

唐が強力な統一国家を確立し、周辺諸国に圧力を加えていた。日本も例外ではなく、白村江の敗戦以来、大宰府に水城を建設したり、山陽道沿いに神護石と呼ばれる山城を建設したりして防御態勢を整えていた。したがって、遣唐使の再開後、平城京がこうした唐を意識して長安城に倣った都を建設したと考えることは歴史的背景として十分首肯できる。しかし、このことが満を持して建設をはじめた藤原京を未完成のうちに慌ただしく捨てる直接の原因であったのだろうか。701（大宝元）年に、大宝律令が施行され、長い間かかって整えてきた統一国家としての制度が完成し、「文物の儀、備われり」と宣言したのは藤原宮大極殿であった。なぜ藤原京では不足だったのだろうか。そこには国際背景をもとにした一般論ではない、別の具体的な事情があるように思われる。

（1）立地をめぐる問題

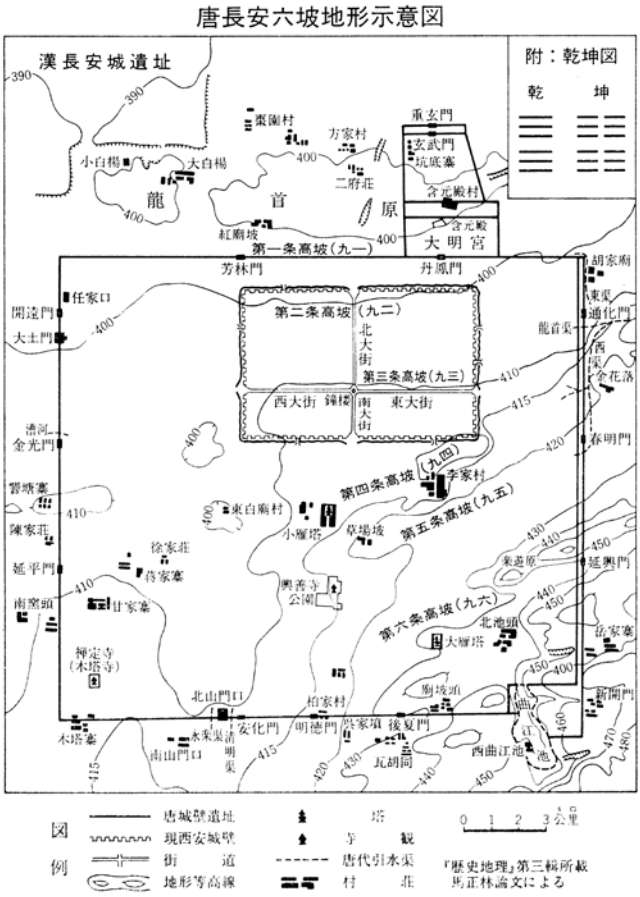
平城京と藤原京の違いが、平面形態の違いに顕著に表れることについては、上記のように、藤原京の都市計画が解明されることによって明らかになってきた。同時にもう一つ、大きな違いは、すでに明らかなことであったが、その立地である。

奈良盆地は、地勢的には、北端の奈良山丘陵から徐々に南に下がり、また、南の飛鳥や高取の丘陵からは北に下がり、盆地中央の王寺付近が一番低い。河川の流れも、北から流れて来た富雄川、佐保川、秋篠川などと、南から来た初瀬川、飛鳥川、米川などが大和川として合流し、亀ノ瀬を越えて大阪平野を通り、大阪湾に流れ込む。つまり、奈良盆地は南北のちょうど中央あたりが一番低く、北と南から中央に地形が下がってくる特徴になっているのである。

藤原京は、奈良盆地の南端に近いところに建設されたためその地形は北から南に上がっていく。そのため、飛鳥、藤原地域では、基本的に水系は、藤原京の中核である藤原宮の方に向かって南から水が集まる形になっているのである。藤原京は水はけが悪く、そのために悪臭が強かったとも言われ、藤原京を短期間で廃棄した原因にあげる人もいる。

これに対し、平城京は、奈良盆地の北端に位置し、中枢である宮殿は京域の最高所を占める。ところが都市プランにおいて平城京の手本となった唐長安城の立地は、平城京とは異なり、むしろ藤原京に類似しているのである。この点は、見逃せない重要な問題である。

（2）唐長安城の建設理念と地勢



第６図　唐長安城地形図

唐長安城は、隋の大興城を引き継いだ。隋大興城は、『隋書』などによれば、稀代のプランナー宇文愷によって設計、建設されたという。この宇文愷の設計理念を分析した馬正林によれば、大興城の地形は、東南が高く西北方向に下がっていく地形で、北の低地は龍首原と呼ばれる。すなわち、南に秦嶺山脈があり、北には、渭河が流れる。大興城あたりでは秦嶺山脈から出た河川はすべて、おおむね東南から西北方向に流れて渭河に注ぐ。また、龍首原から南に向かって６つの段丘があり、６坡と呼ばれる（註7、第6図）。

『隋書』の遷都の詔には、大興城の地を選定するに当たって、龍首原の地名を天子が都するにふさわしいものとしたことが記されているが（註8）、ここを起点に６坡を『易経』にいう乾（「乾為天」で、天をあらわす）の卦に当てはめたとするのである。

すなわち龍首原のところの第１坡を乾の九一とし、以下南に九二から九六までをあてる。繫辞では、初九は「潜龍なり。用いる勿れ」、九二は「見龍田にあり。大人を見るによろしい」、・・・九五「飛龍天にあり。大人を見るによろしい」云々。これらから見ると、太極宮の置かれた北端の地形が低いことは問題ではなく、むしろ「易」に照らしてふさわしいことが重視されたことになる（註９）。

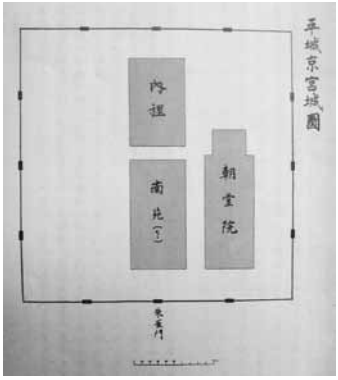
都市プランにおいては、長安城型を採用しなかった藤原京もあるいは立地の選定に当たっては、宇文愷の考えを採用した可能性が残る。なぜならば、『日本書紀』には記述が無く、『隋書』だけに記される600（開皇20）年の最初の遣隋使は、間違いなく大興城を訪れているからである（註10）。すなわち、702（大宝２）年の遣唐使がはじめて長安城を知ったのではなく、最初の遣隋使が大興城つまりのちの長安城の情報を持ち帰っている可能性は否定できない。とすれば、この点からも平城京遷都の直接的な理由を単純に大宝2年の遣唐使が、長安城全体の情報を初めて得たからとする考え方は再考する価値がある。むしろ、この時の遣唐使が初めて知り得た情報は何であったのか。この点を問い直す必要があるのではなかろうか。このことの鍵を握るのは、平城宮第一次大極殿の発掘成果であると、私は考える。

（３）平城宮第一次大極殿の発掘と唐長安城大明宮含元殿の発掘

ア　第一次大極殿の発掘

第一次大極殿を含む平城宮の中央地区の発掘は、1970年から開始された（註11）。その目的は、平城宮の内部構造の解明であったことはもちろんであるが、奈良国立文化財研究所がたてた仮説の証明という性格も有していた。

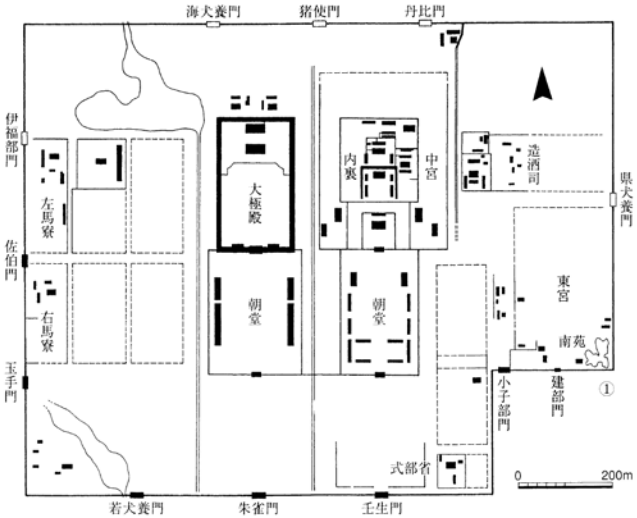
もともと、平城宮の内部構造については、関野貞の仮説が、明治以来の仮説であった（註12）。大極殿と朝堂の土壇痕跡を現地で見つけた関野は、北浦定政の平城京復元研究と自らの研究との基礎の上に、大極殿および朝堂が宮の中軸上にないことから朱雀門を入った中軸上には南苑を想定していた（第7図）。



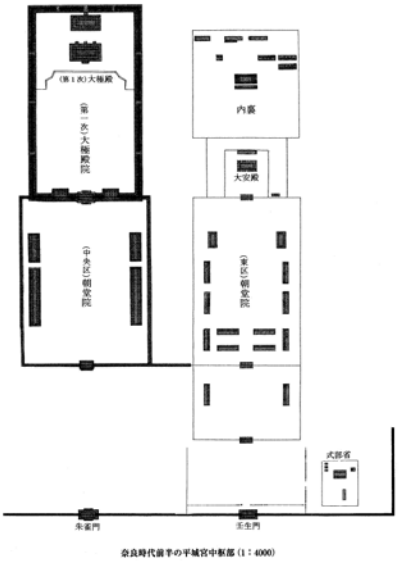
第７図　関野貞　平城宮図

1950年代から奈良国立文化財研究所が継続調査を開始した最初に立てた仮説は、精細な1000分の1地形図と現地に残る土壇の痕跡から、中軸線上にも大極殿および朝堂相当の建物が存在したと考えるものであった。そして遷都直後には中軸線上に大極殿、朝堂が造られ、聖武天皇の時に行われた恭仁京、難波京、紫香楽宮への遷都を挟んで、再び平城京に還都した奈良時代後半に、東の壬生門後方にその機能を移したのが、関野の発見した大極殿と朝堂であるとし、前者を第一次、後者を第二次として呼び分けた。

第二次大極殿、朝堂院地区は基壇の痕跡が、現状の土壇としてよく遺存す



第８－１図　奈良時代前半の平城宮



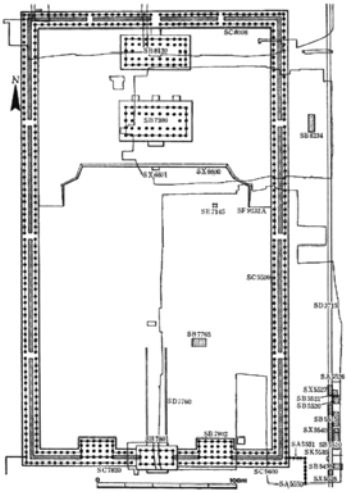
第８－２図　奈良時代前半の平城宮中枢部

ることからその存在が確実視され、大極殿院と12の朝堂が早くから整備されていた。それに対し第一次の方は、大極殿想定地区には民家が残っており、朝堂地区は未整備の状態であった。

1970年から前後４回にわたる第一次大極殿とその前庭の調査によって、大極殿院の様子が詳しく解明された。さらに第一次大極殿復元のために行われた2000年からの毎年の調査を含め、大極殿院の全容は明らかになった（註13、第8-1、8-2図および第9図）。

第一次大極殿院は、南北320m、東西180mの築地回廊が周りを囲む。この中の北半部が高台、南半部が石敷き広場になっていた。高台南面の壇は、およそ2・4mの高さがあり、塼積であった。壇上にはさらに3mもの高さを持つ基壇の上に東西53mの基壇規模の大極殿が建っていた。大極殿の後方には後殿が確認されたが、東西の両側は削平されていたため建物が確認できなかった。広場から高台へは、両側にもうけられた斜道から上がることができ、正面の階段はなかった。

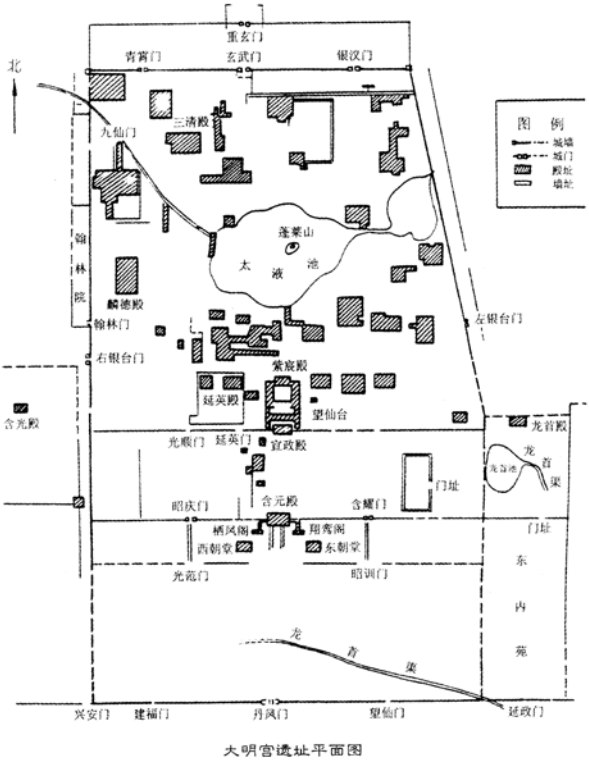
また、大極殿院の南には、朝堂が見つかっているが、これが長大な南北棟が左右対称に2棟ずつ配置され、藤原宮や平城宮東地区の12堂とは異なった配置である。



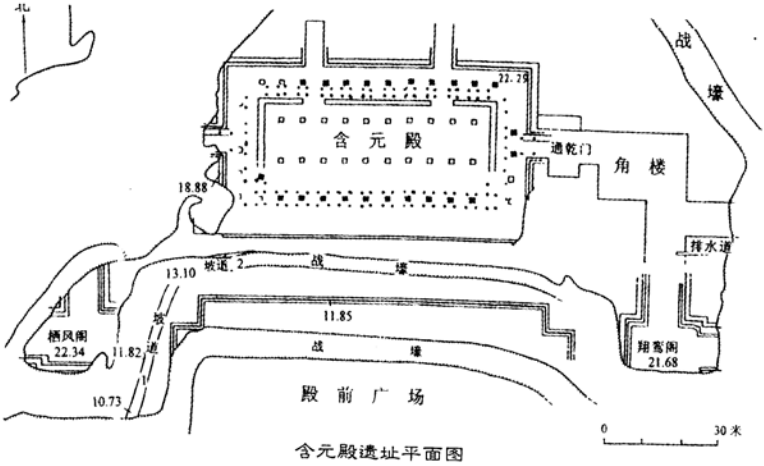
第９図　第一次大極殿院

こうした基本構造は、すでに1970年代の発掘によって明らかになっていたが、この第一次大極殿院の構造は、唐長安城大明宮含元殿の構造によく似ていることが指摘された。もちろん規模や、細部の構造には大きな違いがあるが、全体の配置等を勘案すると大明宮を意識していることに間違いないと判断されたのである。なぜ平城宮の最初の中枢の構造に、藤原宮の配置を継承せず、大明宮を意識した配置をとったのだろうか。このことの意味を考えることが、平城遷都の背景を考える上で重要である（第10-1，10-2図）。

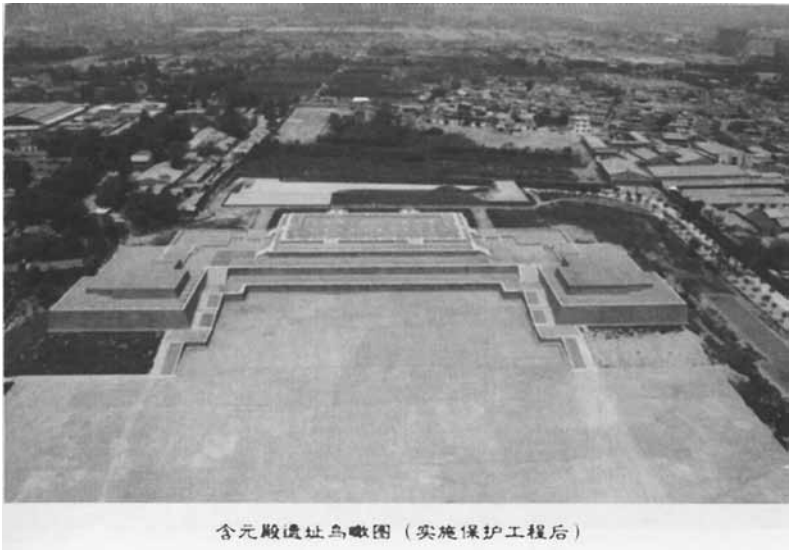
イ　唐長安城大明宮含元殿の発掘



第10－１図　大明宮配置図



第10－２図　含元殿遺址平面図



第10－３図　含元殿整備状況

含元殿の発掘は、1950年代と1980年代に行われ、その後2000年代に入って整備復元のための調査が行われた（註14）。現在、西安市によって大明宮一体が整備され、様相を一変していること周知のようである（第10-3図）。

ここでは、発掘成果などに基づき、その特徴を簡単に示し、特に平城宮第一次大極殿との比較をしておきたい。

大明宮は、龍首原のなかでやや高さのある標高約10mの丘陵上に南北長およそ2.3ｋｍ、東西長およそ1.6ｋｍの規模で建設された。全体の形状は不整形で、台形を呈する北半部には、大液池を中心にして周囲には機能別に多数の建物が建つ。なかでも南には中核殿舎である紫宸殿と宣政殿が南北に並び、西には迎賓館である麟徳殿、北方に道観にあたる三清殿などがある。皇帝の寝所に関わる日常生活空間は紫宸殿より以北と以東にあり、地形的には龍首原東方丘陵部の比較的高所に配置されていた。南半部は横長の長方形で北寄りの中軸線上には宣政殿の南方約300mの位置に含元殿がある。含元殿は、両翼に楼閣がある。東は翔鸞閣、西は栖鳳閣である。

含元殿は、10mを超える高さを有する三層に構築された塼積壇上に、さらに高さ3.46mの基壇を築き、その上に立つ。基壇の大きさは、東西長76.8m、南北幅43mあり、残された礎石から桁行13間、梁行5間、桁行柱間5.35m（唐尺1丈8尺）の巨大な建物である。壇上からは両側の斜道を通って南の広場に降りることができる。南庭には東西両側に2棟の東西方向朝堂が想定されている。含元殿からおよそ650mが大明宮の南正門に当たる丹鳳門である。

こうした含元殿の発掘結果と、平城宮第一次大極殿の発掘成果を照らし合わせたとき、もちろん規模や、細部の構造には大きな違いがあるが、塼積の壇上に大極殿を配し、南庭に東西の斜道からの通路を設ける形が含元殿を意識していることは異論がないところであろう。記録に残る紫宸殿、宣政殿、含元殿で行われた行事や儀式の内容、加えて実際の建物配置上から考えると、紫宸殿や宣政殿が主に内政に関わる建物であるのに対し、広場と朝堂を眼下に見下ろす含元殿が、外政的な性格を有することは疑いない。つまり、含元殿は、太極宮における太極殿の役割を担っている（註15）。

なぜ平城宮の最初の中枢の構造に藤原宮で採用した中枢部の構造を引き継

がず、大明宮を意識した配置をとったのだろうか。その鍵は大明宮建設の事情にあると考える。

（4）唐長安城大明宮の建設とその意味

そこで第一次大極殿のモデルになった大明宮について、これがどういう宮殿で、どういう理由で建設されたのか。そしてそれが長安城のあり方とどう関わるのか、などについて検討してみよう。

『旧唐書』や『玉海』が引く『両京新記』などには、大明宮の建設並びにその後の展開に関する記述がかなり登場する。それらによると、大明宮は、次のような経緯をたどった（註16）。

A．唐の第2代皇帝太宗（李世民）は、退位して太上皇となっていた高祖（李淵）が、晩年病気がちで避暑にも行きたがらなかったため、避暑用に建設しようとしていた永安宮の建設計画を放棄し、635（貞観9）年1月、あらためて長安城北の禁苑中に新たに宮殿を作り太上皇の養老の場とした。宮名を「大明」とし公卿百僚が助力した。しかし、高祖は亡くなり、大明宮を使用することはなかった。高祖の死後、10年間は大明宮の使用記事はない。高祖の死によって、工事は中断したらしい。

B．646（貞観20）年、大明宮を再造営し「北闕」と称する（『玉海』巻170）。

太宗は、太極宮から北闕に移って朝寝し、649（貞観23）年5月に病死。翠微宮、玉華宮で避暑をする以外は、長安にいるときはもっぱら北闕にいて、再び太極宮に住むことはなかった。太宗は、大明宮で朝寝した最初の皇帝である。晩年に風疾を患い、太極宮が低地で湿潤であるのを嫌い北闕を造営したと言われる。この時、皇太子李治（後の高宗）は、常に父のそばにおり、また、武則天も才人として一緒にいた。（武則天は、先帝生前の賜によって皇后となる。）

C．高宗は、即位後のしばらくは太極宮で政務を執る。

1） 662（龍朔2）年4月、北闕の改作竣工前に高宗と武后は太極宮から大明宮に移り、ここで武后は叡宗李旦を生む。この間、名前を蓬莱宮と改める。『両京新記』によれば、高宗はかつて疾病を患い、太極宮の湿潤

と狭小を嫌い、大明宮を造ったとある。

２）663（龍朔3）年、含元殿完工。しばらくして麟徳殿を建てる。

３）670（咸亨元）年3月、蓬莱宮を含元宮に改める。

D．701（長安元）年10月、武則天、洛陽から長安に行幸し、含元宮に入る。11月、含元宮を大明宮と改め、含元殿を改め大明殿とする。『旧唐書』によれば、武則天は、かつて王皇后と蕭淑妃を殺した太極宮に夜な夜な鬼祟が出るため、これを嫌ったという。

703（長安3）年、武則天、麟徳殿にて日本の遣唐使粟田朝臣真人を宴す。

E．705（神龍元）年正月、中宗即位。2月、大明殿を含元殿に改める。この後712年までの間、中宗、少宗、叡宗は太極殿にあるも、実質的には皇帝として機能せず。

F．玄宗は、即位後の714（開元2）年、大明宮を修繕し、それ以後は主に、大明宮と興慶宮に居る。なお、玄宗は、741～756年（天宝年間）は、大半を華清宮に過ごす。756（至徳元）年、安史の乱を避けて四川に逃げ退位。以後、長安に戻って後は、興慶宮に居り、最後は太極宮に移って神龍殿にて762（宝応元）年4月5日死去。

G．以後、歴代皇帝は、主に、大明宮にて朝寝する。

これら一連の大明宮建設の経緯とその理由を考えると、長安城の占地のあり方に主要因があることは明らかであろう。すなわち、長安城の地形から低地に立地する太極宮を皇帝の常の朝寝の場所とするには、あまりにも条件が悪すぎたことに尽きる。太宗以来歴代皇帝が病気がちである理由が、太極宮の湿潤な環境によるものと考えられたため、より高地で条件の良好な地として大明宮を建設したのである。またそこは、長安城全体を見渡すことのできる点でも望ましいものであった。このことに関しては、先の『両京新記』には、大明宮の立地を、宮城北の高い岡にあって南を望めば坊市を掌のうちに俯瞰できると記している（註17）。

（５）702（大宝2）年派遣の遣唐使と大明宮

『旧唐書』長安3年の条には、武則天が遣唐使粟田真人を麟徳殿で宴したことを記している（註18）。この時の一行は、間違いなく大明宮を見ているのである。ここで彼らがはじめて知り得た情報は、藤原宮では考えられない巨大な含元殿などの建物とその配置であったろうが、同時に大明宮の建設事情であったに相違ない。皇帝の居場所が地形的に低い位置を避けるために大明宮が建設されたとすれば、長安城と同じ立地をとる藤原宮もまた懸念すべき重大な問題を内包していることになるのである。

天武・持統朝は、日本の律令体制をほぼ確立し、天皇を中心とした統一国家の完成を目前にした時代であったと考えられている。しかし、一つ大きな懸念があった。それは、天武の後継者として最も期待をかけていた草壁皇子が、最大のライバルと目された大津皇子を滅ぼしてまで即位に期待をかけていたにもかかわらず、即位する前に27歳の若さで亡くなったこと。やむを得ず持統が跡を継ぎ、孫の文武に渡したにもかかわらず、文武もまた24歳の若さで崩御した。おそらく確立しかかった天皇制の今後を考えたとき、遣唐使が得てきた唐長安城の事情は大きな衝撃を与えたに違いない。私は、平城遷都を急いだ直接の理由はここにこそあると考える。もちろん長安城の全体プランを手本にしようとしたことに違いはないが、主たる眼目は、平面形よりも立地に主な要因があったと考えるのである。宮城を最も立地のよい場所に選定し、そして長安城では、外に設置した大明宮相当の宮殿をはじめから宮殿内部に組み入れて計画したのが、平城京であったと考えることができるのではなかろうか。

このように考えたとき、「遷都の詔」には、このあたりの事情が微妙に反映されている。

（6）「平城遷都の詔」を読み解く

遷都の詔には、なぜ遷都をするかについての理由から入る。「朕（元明天皇）は民に労苦を強いる遷都は急がなくともよいと考えるが、王公大臣がこぞって望むからである」、と弁明する。まずここには、急ぐ必要がないという、天皇自身の判断が示され、それに対して王公大臣は急いでほしいと願う状況

が示されている（註19）。ここの原文は「必未遑也」とあり、平城遷都の詔の原本になったと考えられる『隋書』高祖伝の詔では、「改創之事、心未遑也」とあり、単純に「心」が「必」に写し間違えられたとする説もあるようだが、私は意図を持って変えられていると考える。すなわち、高祖伝の方は、隋の建国に際して、当初の政治情勢からまだ国の骨格を固めるのに忙しく、皇帝としては首都建設のゆとりがないという精神的状況を示しているものと考えられるのに対し、平城遷都の詔では、遷都はそれほど緊急課題ではないという認識が示されているのであって、明らかにその趣旨を変えている。

では、天皇の認識と王公大臣の認識のずれはどこから生じているのか。ここに大宝４年に帰朝した遣唐使が持ち帰った新情報に対する天皇と王公大臣の認識のずれが示されているものと考える。遣唐使粟田真人一行が持ち帰った長安城と大明宮の情報は、律令体制を整えつつある幹部たちにとって大きな意味を持ったことは想像に難くない。もちろん平城京の全体プランを長安城に似せて建設したことには長安城全体に対する意識の強さをうかがわせる。しかし、都城の平面形を藤原京型から平城京型=長安城型に変更することはそれほど一刻を争うほどの焦眉の問題であっただろうか。なるほど、最新の首都の有り様に変更することは、東アジアの国際情勢の中で唐や周辺諸国と対等に互していくうえで大きな意味を持つ。だからといって、すでに法や制度の整備が終わり、それに対応した首都の建設も始まっている。統一国家の中枢機構として必要なものは、藤原京でも十分整えられたはずである。事実、現在考えられている藤原京は面積的にも平城京に匹敵する大きさなのである。

だからこそ、「遷都のことは、そこに住むものにとっては良いが、多くの民に労苦を強いるもの」である以上、「それほど急がなくてもよいのではないか」という、天皇の判断はここにあるのでは無かろうか。とくに新たな宮室の建設という意味では、これは天皇個人にかかわる問題であって、民のことを思えば、それほど急がなくても、という天皇の思いとして表現されたと見ることができる。

しかし、皇帝の居所が、なぜ大明宮に移されたのかという理由を知った王公大臣にとって、天皇の健康に影響を与える可能性がある藤原京の立地は、

重大事であり、天皇個人の問題ではないという意味で、遷都は喫緊の課題となったのであろう。目指す国家は天皇を頂点とした統一国家なのである。このことが遷都の詔には微妙に反映されていると見たい。

ところで、平城遷都の詔が、『隋書』高祖伝の詔をもとに作られているように、記紀には、中国の複数の原書から、さまざまな引き写しが行われていることが古代史の方で解明されてきている。この点から記紀などではこうした記述がそのまま歴史的事実を反映しているのか、十分に検討する必要のあることが指摘されている。

しかし、この遷都の詔に関しては、もっとも核心に触れるところは、見事に日本の実情に合わせて書き換えていると考えられる。いま述べた「心」→「必」もそうであるが、隋書では、大興城占地の最大の根拠とした龍首原とその地勢を「龍首山のある川原（龍首原）は秀麗で、草木の滋養に富み、トいの上でもよい土地で、都を建てるにふさわしい」（註8）と述べている。このもっとも肝心の部分を平城遷都の詔は、有名な「四つの動物が河図に相応じ、三山が鎮めをなし、亀甲や筮竹による占いもともによい結果であり都を建てるにふさわしい」（註19）と明らかに現実の平城京の立地を正しく指摘して、その正当性を論じているのである。

まとめにかえて

さて平城京への遷都の背景と直接の理由を以上のように見てくると、日本古代都城の骨格が何であるか、あらためて浮き彫りになってくる。

これまでの研究から、古来、日本では天皇の代替わりごとに宮殿を移す遷宮が普通であると考えられてきた。しかし、天皇を頂点とする統一国家の形成とともに、その中核として、安定した恒久の首都が求められた。首都の役割が、統一国家の運営を担うために新たに整備された官僚機構の維持とそのための膨大な官僚群の集住にあったことは疑いない。しかし、首都の建設によって天皇の代替わりごとの遷宮が消滅したわけではない。平城宮内裏地区での発掘成果による６時期の変遷は、天皇の代替わりによる宮殿の更新ととらえることができ、その意味において、遷宮の思想は維持されていると見る

ことが可能である（註20）。

つまり、藤原京であれ平城京であれ、その中心には、常に宮殿があり、天皇の住まいがあった。遷都の時に何よりも優先さるべきは、中核たる天皇の居所が、まず、いかにあるべきかで、わずか16年にして藤原京から平城京への遷都を断行した背景には、なによりも天皇の居住地としての条件が十全であるかどうか、が問われたと見ることができる。

このように見てくると、王侯の宿営地としての日本古代都市の特徴の一端をあらためて認識することができるのである。

注

（註１）井上和人『日本古代都城制の研究』吉川弘文館、2008

（註２）愛宕　元『中国の城郭都市』中公新書、1991

（註３）澤田吾一『奈良朝時代民政経済の数的研究』、1927

（註４）田辺征夫「遷都当初の平城京をめぐる一・二の問題」（『文化財論叢Ⅲ』奈良文化財研究所学報第65冊、2002）

（註５）岸俊男『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988。小澤毅『日本古代宮都構造の研究』青木書店、2003

（註６）この時の遣唐使がもたらした情報が平城京遷都に与えた影響は、1990年代から論じられるようになっていたかと思うが、文章として指摘された初見は、金子裕之「藤原宮」『季刊考古学　別冊５　古代都市文化と考古学』雄山閣出版、1994。これらについては、前掲（註1）井上和人著作に詳しい。

（註７）馬正林「唐長安城総体布局的地理特征」（中国地理学会歴史地理専業委員会＜歴史地理＞編委会編『歴史地理』第三輯、1983）

（註８）『隋書』高祖伝には、「龍首山、川原秀麗、卉物滋阜。卜食相土、宜建都邑。」とある。

（註９）妹尾達彦『長安の都市計画』講談社、2001。この書の中で著者は、隋大興城が遊牧系の政権が中国の古典的都市プランにもとづいて築いた都市であり、北魏洛陽城の影響を受けていることや新たな首都建設の背景である政治情勢などに言及し、唐長安城がこれをもとにさらに整備発展させたことを詳論している。また、加えて、その宮城が低地にあたる地形的な悪条件から大明宮が建設されたことについても触れている。

（註10）『隋書』開皇20（600）年の遣隋使については、『隋書』にのみ記載があり、『日本書紀』に記載がないところから本居宣長以来議論がされてきた。これに限らず、遣隋使の回数については、両書のあいだにほかにも違いがあり議論がある。しかし、近年この開皇20年の遣隋使については、これを認め

る方向にあるようである。筆者も、隋側にあえて作為をしなければならない理由が考えられない以上、むしろ日本側の事情で『日本書紀』から削除されたと考える方が合理的であるとの考えに立っている。また、この存在を認めたとき、この時の遣隋使は、大興城に行っているのである。これらについては、気賀澤保規編『遣隋使がみた風景』八木書店、2012を参照。

（註11）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸＩ』奈良国立文化財研究所30周年記念学報第40冊、1982

（註12）関野貞『平城京及大内裏考』、1907

（註13）第一次大極殿の調査は、註11の報告書に収録された1970年代までの発掘調査以後、平城京遷都1300年にあたる2010年の実物大復元に向けて、1998年度から2009年度まで毎年発掘調査が行われた。それによって、第一次大極殿および大極殿院の全容が明らかになっている。各年度の『奈良文化財研究所紀要』を参照。

（註14）中国科学院考古研究所編著『唐長安大明宮』中国田野考古報告集考古学専刊丁種第1号、1959ほかによる。

（註15）含元殿の用途について、『唐六典』巻四「尚書禮部」では、「凡元日大陳設於太極殿、今大明宮於含元殿、在都則於乾元殿。・・」とある。

（註16）大明宮関係記事は、呉春、韓海梅、高本憲主編『唐大明宮史料匯編』文物出版社、2012にまとめられており、これによっている。

（註17）『両京新記』「大明宮南接京城之北面、西接京城東北隅。初高宗嘗患風痺以宮内湫湿屋宇擁蔽・・・（中略）・・・北據高岡南望爽塏終南如指掌坊市俯而可窺」

（註18）『旧唐書』長安3年条、「其朝臣真人来貢方物。朝臣真人者、中国戸部尚書、冠進徳冠、其頂為花、分而散、身服紫袍、以帛為腰帯。真人好讀経史、容止温雅。則天宴之於麟徳殿、授司膳卿、放還本国。」

（註19）「戊寅、詔曰、朕祇奉上玄、君臨宇内。以非薄之徳、処紫宮之尊。常以為、作之者労、居之者逸。遷都之事、必未遑也。而王公大臣咸言、・・・（中略）・・・安以遷其久安宅。方今、平城之地、四禽叶図、三山作鎮、亀筮並従。宜建都邑。・・・」。本文中の読み下しは、直木孝次郎編『続日本紀』東洋文庫、1986をもとにしている。

（註20）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』奈良国立文化財研究所学報第50冊

なお、文中の図で平城京、藤原京に関するもののうち特記しないものは、奈良文化財研究所作図による。